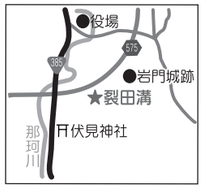
探訪 94

ながわ

那珂川町郷土史研究会



裂田溝21　湯浅殿橋周辺

裂田溝に架かる湯浅殿橋を渡ると、寺山田集落に入ります。橋のすぐ東側にある広い屋敷は、江戸末期、黒田藩の家臣であった湯浅亨氏の役宅があった所です。亨氏は父親（黒田藩合薬製造局長）と共に、当時、屋形原や柏原にあった藩の合薬製造に従事されていました。合薬製造所とは、水車を使って材料を砕き、火薬を作る工場です。幕末になると黒船来航による尊王攘夷運動などが激化し、世の中が騒然となった時代で、藩の火薬製造所の需要だけでは間に合わなくなり、急きょ水量が豊富な那珂川の水車が選ばれました。安徳村「風車井堰」と仲村「日佐江井堰」の水車を借り受けて製造が始まり、出来上がった材料は馬で屋形原の合薬製造所へ運ばれました。湯浅氏は明治維新後もこの役宅にとどまり、漢学の私塾を開くと共に、27年間地元の小学校教師として献身されました。明治35年、福岡に移住される際に、青少年育成のためにと私有田を村に寄付されました。村ではこの収益金を基に育英基金が運営され、多くの人が恩恵を受けています。地元では先生の遺徳をしのんで橋の名前を「湯浅殿橋」と名付け、親しみを込めて「ゆあさどんばし」と呼んでいます。この屋敷の北側は裂田溝に面し、明治以前からあったのではと言われるヤブニッケイやタブの大木が水面にかぶさるような形で影を落としています。屋敷内の十数種類の花木は、折々の季節に彩りを添え、散策を楽しむ人たちの足を止めています。ここの景観は里山ならではの趣を残していて、「空飛ぶ宝石」とも称される「カワセミ」が、椿の木の根元にある土管を目指して飛んでくる姿が見受けられます。

橋のたもとには「猿田彦」が、寺山田の集落を守るようにして建てられています。「猿」の字は円で囲まれ、「田彦」は四角の枠で囲んであります。いつも季節の花が植えられていて、周りの人たちの優しさが感じられます。ここから150m先の四つ角に、那珂川八十八ヶ所69番札所「阿弥陀如来」があります。『続風土記拾遺』によると、浄光寺と共に原田家の菩提寺と伝えられる「法性寺」という寺の跡だと記されています。境内には古木の櫨の木と銀杏の大樹があり、晩秋の彩りを競い合っています。銀杏の木は、毎年大きな実をつけます。また、櫨の木の根元には「杯状穴」と言われている杯状の石があります。西側には、那珂川八十八ヶ所68番札所「母子観世音菩薩」が祭られています。南側の道の行き止まりの家には70番札所「不動明王」が祭られ、この家には『文政七年仲谷坊良恭代』と銘入りの大磐があります。[文政七年　1824年]

こちらの屋敷の高台には『少弐景資の墓』と伝えられている五輪塔があります。少弐景資は文永11年（1274年）と弘安4年（1281年）の2回にわたる蒙古襲来に際し、日本軍の第一線の指揮官として活躍した勇将です。弘安8年（1285年）、鎌倉幕府の内部で政権争い（霜月騒動）が起こり、討伐騒動へと展開しました。少弐景資は蒙古合戦に参戦した多数の鎮西御家人の要請を汲み取って岩門城（城山）に挙兵。大宰府にいた兄の少弐経資は、鎮西奉行、筑前守護人としての責任上、肥前守護北条時定らと共に岩門城を攻めて景資を滅ぼしました。これを「岩門合戦」といいます。外国侵略防衛の第一の功将も、国内攻略の犠牲となったのです。

次回は、倉掛堰周辺を紹介します。

せがまれて孫と登りし
城山を
仰ぎて歩く古代偲びて
絹枝

コースメモ

57. 橋－17（湯浅殿橋）
↓
次号へ
58. 落水口（上流側）

史跡メモ

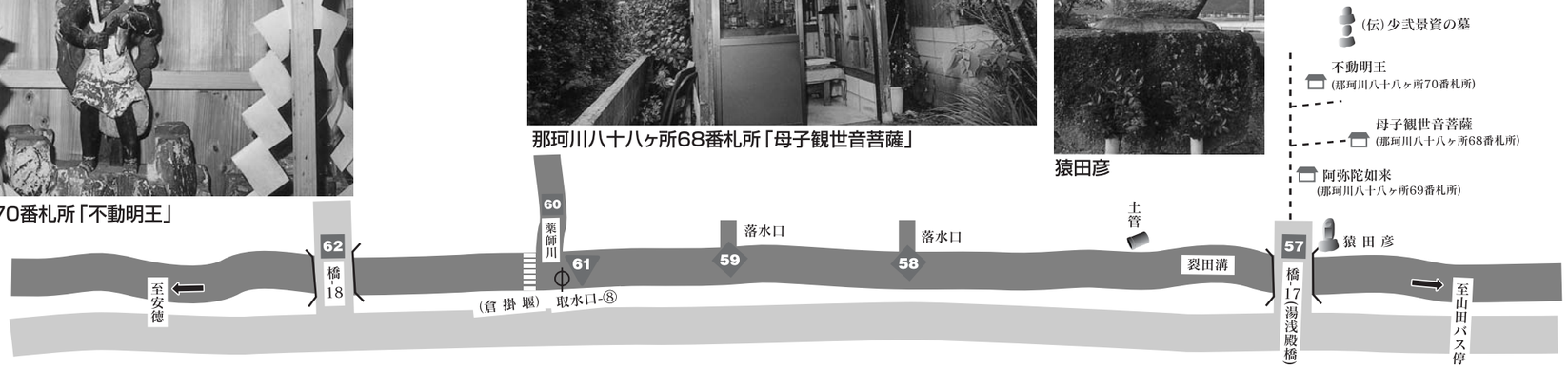
- 猿田彦
- 阿弥陀如来（那珂川八十八ヶ所69番札所）
- 母子観世音菩薩（那珂川八十八ヶ所68番札所）
- 不動明王（那珂川八十八ヶ所70番札所）
- （伝）・少弐景資の墓

（伝）少弐景資の墓

那珂川八十八ヶ所70番札所「不動明王」

那珂川八十八ヶ所68番札所「母子観世音菩薩」

猿田彦



裂田溝沿いに茂るタブの大樹とヤブニッケイ

櫨の木と銀杏の大樹

那珂川八十八ヶ所69番札所「阿弥陀如来」

湯浅殿橋と猿田彦